

ガイスト
GEISTと名付けられたその新型万能細胞は、人間の

皮膚だけでなくほぼ全ての種類の臓器に分化できる能力
そして無限に増殖する能力を持ち合わせていた。

この細胞の作製は、二〇一二年の研究成果を十分に応
用したことによって実現した。そして実際に使用したと
きの発癌性の心配性も皆無であったため、この細胞を利
用した不老手術や新薬の開発が飛躍的に進歩したのであ
る。

ファウスト博士はヒトの体細胞の中に約二万個存在す
るとされる遺伝子の中の僅か四つの特定遺伝子を、ヒト
の皮膚や血液等の細胞に移植して数週間培養すると
GEIST は完成すると笑みを浮かべて記者の質問に答え
た。

それに加えて、GEIST は実用性に富んでいた。ヨー
ロッパの錬金術師が作り出した人造人間は、何も根拠も
ない空想的な産物であると述べられていたが、その錬金
術師たちが切望したホムンクルスの生成の成功が現実の
物となったのである。ところが、GEIST は通常の人工
多能性細胞とは明らかに異なった機能を有していた、そ
れは無機物と融合することができる作用があることだ。
簡潔に述べると、改造人間が容易に誕生してしまうので
ある。

二〇五〇年十二月十五日、アメリカはこの細胞移植を
大幅に簡略化させる方法を探るために、ドイツや日本の
医学者を招集し、GEIST の共同開発に励んだ。アメリ
カ政府は新型万能細胞の効力を高く評価していた。その

◇ ◇ ◇
『全世界の人類を、人を遙かに超越させた生物へと変貌
させたい。そう感じたことはあるか？』

この言葉を発した人物を一言で言い表すとすれば「全
知全能」であった。彼は知識を貪欲に吸収することを何
よりの至福としていた。

そして彼は幼い頃から読んできた聖書や神話、最高峰
の大学等の学術機関から得た圧倒的な科学・医学の知恵
を働かせ、再生医療への応用が期待される『新型万能細
胞』の開発に成功。医療機関の発展に大いに貢献した。

その人物の名はゴットフリート・ジーク・ファウスト。
研究発表が済んだ後に、彼は友人に対しこの言葉を述べ
た。すると友人は一瞬呆気にとられた。

普段から『ゴット』と呼び、親しんできた人物から発
せられたとは思えず、動揺せざるを得なかったのだ。

誰も気づきはしなかった……。その神に最も近い人物
と持て囃されてきた男の『人ではない潜在能力』を。

目的として、GEISTを使用して手術を実用化することで医療費を大幅に削減し、国民をカバーする公的医療保険制度を導入することを望んだからである。

それに対して、改造人間を大量生産して全世界を支配することを望む二つの国家が台頭した。ロシアと中国である。両陣営はアメリカの軍事力に対抗するために、クローンの個体全身を作成したうえで、更にそれを戦争に利用できる侵略型改造人間の実用化を目論んでいた……

そして僅か二年後の二〇五二年、コンピュータと人間の神経が直結された改造人間が普遍的な存在として認識されるようになり、世界経済は発展した。しかしこれが最悪の大惨事をもたらすことになる。

では何が始まったか。

第三次大戦だ。二〇五〇年代は科学技術・医療技術が発達したことで世界人口は百億人を超えた。これにより世界の食糧事情・資源問題は急激に悪化。エネルギー資源や GEIST 製の新薬を争奪するための争いが起きたのだ。この戦争はアメリカ国内で発端したことで、大同士の軍事衝突が起こり、世界人口は百億人から五十億人と半分にまで減少した。

これにより世界情勢は大きく一変した。まずアメリカ合衆国は社会に反感を持つ者・独自の思想を持つ、所謂アウトローと呼ばれる存在によって形成されたテロ組織の集団、ダイナ・ヴィランがこれに大きく関係している。

この組織の首領であるタイラント・オールドロジャーは GEIST を研究所から無理矢理強奪すると、すぐさま生

物兵器を開発するように、組織内の闇医者に促した。その結果、VENOM・Virus、通称 VV という変異体が誕生したのである。この生物兵器は体内に送り込むことによつて、生物の代謝を異常促進させ、異常な巨大化や身体の一部に異様な発達を引き起こす。この有毒性が高いウイルスをダイナ・ヴィランが活用したことによつて、ニューヨークはゾンビが都市を蔓延る最悪な都市へと変わり果ててしまい、封鎖されたのである。

そして三十万人という犠牲者を出した米軍は壊滅し、アメリカは陥落した。

世界最大規模の軍事力を持つアメリカ合衆国がテロリストによつて僅か一日で乗っ取られたこの事変は世界を震撼させた。

しかし、この惨劇は全てタイラントの思惑通りであった。トレードマークである赤髪と、耳や首筋に付けている純金でできた装飾品をなびかせ、黒いマントを羽織り、白いシャツに赤茶色のズボンと黒いブーツを身に付けた彼は不気味な笑みを浮かべて、大統領を「変異させた右手」だけで処刑すると、こう宣言した。

『これからは、我々改造人間がこの衆愚政治を統治する。力ある者がこそが衆衆を導き、国家を偉大にするのだ。俺がこの国に「富」を与える……!!』

あまり鍛えているようには見えない、長身で中性的な容姿である赤髪の青年が国家を転覆させたその光景に、人々は恐怖のあまり只々息を飲む他無かった。

改造人間は「タキオン粒子」を応用して、人間を遙かに超越した速力で活動することができる。それに加えて

動力の作用の下で変形することのない剛体、即ち身体を硬化化する能力を持ち合わせていた。

それにより、改造人間は戦場の最前線で戦うことになり、戦争は泥沼化していった。

それから三年後の二〇五五年、アメリカに続いてロシアや中国も改造人間による軍事クーデターが発生し、自らが新たな皇族であると名乗る改造人間によつて形成されたロシア帝国と中華帝国が復活した。

イギリスでは自らをアーサー王の末裔であると名乗る名門貴族のキャメロット家、フランスでは名門財閥のサンジェルマン家も改造人間となるための不老手術を受け、勢力を拡大させていた。

そんな中、のテクノロジーを積極的に取り入れていたドイツで衝撃的な事件が起きた。

ドイツ第二帝国陸軍時代の軍服を着た謎の青年将校たちが突如、ドイツ連邦議会議事堂を占拠。そして無差別に国中の政治家や報道陣を殺害したのである。

「GEISTER」後(ご)と呼ばれるドイツ軍に扮した改造人間で構成された兵団が首都ベルリン市街を蹂躪。街は恐怖に包まれた。

この天変地異の様な出来事はドイツ政府を転覆させた世紀の大事件、『ベルリン事変』として世に語り継がれることとなる。

GEISTER の身体は全て新型万能細胞で作られており、現代兵器の効き目は皆無に等しかった。

そのため世界各国の軍隊は彼らに太刀打ちできず、ドイツ連邦共和国は呆気なく崩壊。ドイツ第四帝国が誕生した。その即位した皇帝の名前は……
テオドール・ラインハルト。

テオと呼ばれるその凶悪犯はかつてナチスドイツを率いた名前を言っただけでいいけないあの総統に匹敵する程ドイツ国内で嫌悪されている人物であった。

それだけでなく、外国人を標的とした略奪や詐欺、それらの犯罪を元手とした団体経営、ドラッグの売買で財を成したラインハルト家は、世界最悪の貴族として忌み嫌われていた。

テオドールはGEISTで製造した刃や銃、化学兵器で

GEISTERの手下に命じて反政府主義者を襲撃させた一

方で、ベルリンの大改造計画を主導していた。

しかも彼は不老手術を受けていたため、ずっと若く健康なままで治世を全うするつもりでいた。

しかしその治世はそう長くは続かなかった。医者から

GEISTER所属の軍人と化したあの人物との戦いに敗れ、

外道じみた皇帝は投獄されたのである。よって僅か五年で退位させられたのである。そしてテオドール・ラインハルトには死刑判決が下ったが、銃殺刑に処しても弾丸は砕け散り、首を吊るしても鎖はちぎれ、誰も彼を殺せなかった……!!!

そこで彼は関係を持った女性らとの間の複数の子供と共に亡命し、行方をくらましたのだった。

◇ ◇ ◇

それから十年後の二〇六五年、ようやく戦争は終結

第三次大戦は百カ国以上を滅亡に追いやり、国家がこのように再編された。

■ドイツは帝国時代の領土を取り戻し立憲君主制のドイツ帝国を統合

■日本・イギリス・イタリアも立憲君主制の皇国・王国を再編成

■インドはGEISTERが自らをインド神話の神々の末裔であると主張し、神話上の幻想世界を形成

■ロシア帝国は旧ソビエト連邦時代の領土を吸収

■ヨーロッパではフランスとオーストリアが台頭。北

欧諸国ではフィンランドが存在感を発揮

■中華帝国は鎖国状態(?) 独裁国家を形成

■アメリカは北アメリカ大陸全土を併合

■スペイン王国はブラジル以外のラテンアメリカを併

合、その他の国家はデータなし 報道機関が遮断されて

いるアフリカ諸国以外は滅亡の可能性あり

そして二〇九〇年代になると、「魔術」と呼ばれる

GEISTERに先天的に備わっている超能力が体系され、

魔術が国家にとつて欠かせないものとなっている。

その中でも強力な魔術技師は国の力として重宝されるようになった。そして外交はまともに行えない程、世

界の治安は混沌を極めていた。そこで日本は外務省と防

衛相が合同で形成した魔術技師で構成された特殊機関

武装大使館を設立したのであった。

……これは世界を暗躍しその修羅の如き強さと冷酷さから人々に恐れられた一人の日本人の青年と、この戦争を引き起こした凶悪な半グレ集団のリーダーの次女として育てられたドイツ人の少女の物語である……。

◇ ◇ ◇

二〇九〇年 ドイツの港湾都市 ハンブルク

この都市に流れえるエルベ川は北海に注ぎ込む大河だ。そんな夜のエルベ川沿いの港に、一人の少女が矢のような勢いで走っていた。その後を五人の軍服を着た警官が凶行に及ぶかのように、凄い勢いで追跡する。

「*Halt!* 『止まれー』と叫びながら警官は悪魔の様に

その少女に走り迫った。

そのドイツ人の少女は長い赤茶色の髪に、神秘的な金色の目。誰が見ても美しい少女だ。しかしそれに対して彼女はみすばらしい白いワンピースを着ており、とても貧相であるように見える。

「*Fahr zur Hölle!* 『くたばりやがれー!』警官の一

人がそう言い放つと、所持していたGEIST製の自動小銃を取り出し、けたたましい発射音を鳴り響かせた。

ところが次の瞬間響いたのは銃弾が切断される金属音であった。警官たちは自分たちの目の前に、頭にバンダナを巻いた黒装束の男が立っているのに気付く。そのとき発砲した警官の虹彩に怯えの色が浮かんだ。正面から吹き付ける殺気を感じたからだろ。そう実感した矢先、青白い刃が警官の胸元を十字に切り裂いていた。勢い良く鮮血が溢れ出る。

警官の口から悲鳴が迸ると、それでも戦意を失っていない残り四人の警官は大型の戦闘用ナイフを抜き、現れた少女をかばう黒装束の男に向けて襲いかかった。その

うちの一人が「*Scheiß!* と叫んだかと思うと、目にも

留まらぬ速度で銀色の風が彼ら^らを無惨に引き裂いた。血

飛沫^{しぶき}が舞い、警官隊が全滅するのを確認すると男は強張

った表情を浮かべる少女にこう尋ねた。

『はじめまして。君がラインハルト家の次女、
アデーレ・ラインハルトだな？』

プロローグ 完